

# 「言葉」の意味についての一考察

中村 悦子

(山 愛美ゼミ)

## はじめに

「りんご」という言葉を聞いて、どんなりんごを想像するだろうか。日本で生まれ育った人は、真っ赤で丸く、大きいりんごを想像するかもしれない。では、海外ではどうだろうか。私のイメージだが、日本ほどの大きさのりんごはなく、さらに赤いりんごよりは青りんごの方がよく売られているのを思い浮かべる。言語学者の池上嘉彦(1984)は、「一つの言語を習得することは、一つの特定の捉え方——一つの『イデオロギー』——を身につけることでもあるのである」と述べている。日本語の「りんご」が「apple」という英語になった時、果物であるという認識は同じでも、言語の違いによって捉え方にはかなりの差が出てくるだろう。このように、「りんご」という一つの言葉(単語)だけでも、想像するものは人によって異なる。そして、生まれてからどんな環境で、どのような世界の中で育ってきたかということも、捉え方の違いが生じる大きな要因の一つだと考える(もちろん、生まれ持った感性とも言えるかもしれない)。「りんご」というものを想像した時、頭に浮かぶイメージは一人一人異なっているにも関わらず、「りんご」が果物であることがわかればよいのだという思いから(本当はそのようなことは考えもしていないが)、誰もが共通認識として理解できているように思い込んでしまっていると感じる。「言葉」とは、人に自分の考えや思いを伝える手段であるにも関わらず、受け取り手の捉え方によっては自分の思いが正しく伝わっていなかったり、反対に伝えられていなかったりすることが多々あるのではないだろうか。

私は、9歳からフルートを始め、音楽高校卒業後は3年ほどフランスに音楽留学をして、フルート一筋の生活を送ってきた。約15年間、フルートを通してクラシック音楽を学んできた中で、私は、

フルートを演奏して音楽で表現することが、自分の感情を言葉よりも人に伝えられるものだと確信していた。現在も、そう考えている部分もある。そのような経緯もあって、私たちが日常生活で当たり前のように使っている「言葉」は、人に何かを伝える手段として有益なものなのだろうかとか疑問に思う時もある。

このように「言葉」について考えていると、自分の語彙力のなさや知識のなさに打ちひしがれる。だからこそ人は、言葉を知るため、そして言葉以外の表現を求めて、本を読んだり映画を観たり、音楽を楽しむのだと想像する。このようなエンターテインメントは、知識を補ってくれるという側面もあるかもしれないが、それ以上に、言葉では表せない感情を伝えてくれるものだと感じる。本論文では、私自身が触れてきたエンターテインメントを紹介し、「言葉」についての考察を深めたい。映画『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』(1997、アメリカ)、アニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』(2020、日本)、映画『Coda コーダ あいのうた』(2021、アメリカ)の3作品を取り上げ、考察をする。

## 1. 映画『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』

### (1) 本の知識からは得られないもの

まず、映画『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』(1997、アメリカ)から考察する。本作は、天才的な頭脳を持ちながらも、幼い頃に里親から暴力的な虐待を受け、そのトラウマから逃れられない一人の青年ウィルと、最愛の妻に先立たれて失意に喘ぐ心理学者ショーンとの心の交流を描いたヒューマンドラマである。ウィルは、一度読んだ本はページ数も覚えて暗唱できるほどの頭脳の持ち主で、人と会話する時、ウィルはその膨大な

知識を言葉で並べ立て、相手の入る隙をなくして論破する。ショーンと出会った直後も、彼の部屋に置かれているものを見て瞬時に彼がどんな人生を送ってきたのか見抜き、言葉で彼を責め立てる。それに対して、ショーンは「知識だけから俺の人生をわかったと思うな」と反論する。言葉で書かれた本や自分の経験から得た知識だけで、他人の思いや気持ちの全てを理解することは不可能だと感じる。

具体的な例として、私自身の体験について述べる。私は小学校高学年の夏、富士山に登った。その時見た、天の川まで綺麗に見えた一面の星空の美しさは私にしかわからないと思う。それは、その時の私を感じ取った美しさである。また、その時一緒に星空を見上げていた家族も、それぞれの感じ方をしていただであろう。その美しさを、単に言葉を並べただけで理解してもらうことはできない。本論文もそうである。私が今書いていることは、どれだけ読者に伝わるのだろうか。

本の力というのは、読者自身の人生経験や想像力によって言葉以上の感情が現れてくるという点で、言葉の力を最大限発揮しているものだと感じる。本から得た知識によって論破するウィルのショーンに対する考えは、ある意味正論で、間違っているわけではないが、ショーンにとっては、理解してもらえたとは到底思えないことは容易に想像できるだろう。

## (2) 言葉以上の何か

ショーンが反論したように、他人のことを理解するのは難しい。時間をかけてその人と接し、その人の気持ちになって想像する力が必要である。しかしそれだけではなく、言葉では伝えられない思いというものもあると考える。自分が持ち合わせている「言葉」の中にはない、「言葉」では表現し難い気持ちは、「言葉」を使って論理的に表現できるものではないため、どんな気持ちなのか自分でもわからないとしか言いようがない。それは、自分のこれまでの人生経験から得た、自分の中にある「言葉」以上の何かではないだろうか。

臨床心理学者である河合隼雄の対話集の中で、河合と落合恵子、宮崎駿の3名によって、次のようなやり取りが行われている。宮崎(1990)は、

「僕は若い人には、空間をつくって、そこへ自分で行けという話をします。だからある建物を描こうとして資料にする写真を見たときに、その上へのぼって、そこから何が見えるかを頭で思いめぐらせ。そのときに見える風景というのは全部自分が見てきた風景で、だから物を見なかったら、いくら頭をひねって想像力を働かせたって何も出てこないぞ。全部見てきた部品でできあがるんだから、空想力というのは嘘で、自分が見たものだけだというふうに、そう言ってますけど、ほんとですかね(笑)。生まれる前に見た風景というものもあるんじゃないとか、ときどき思うことがありますけれども」と述べ、河合(1990)は「ありますよ。あっちで見たり、こっちで見たりしてますから(笑)」と返す。それに対し、落合(1990)は「よく、見えないものに心を働かせることが想像力だという言い方がありますね。それはそうだと思います。一方では、見えるものをちゃんと見てないと、見えないものは見えないんだということも真実だと思います。見えるものを見てないで、見えないものを見ることはできない」と述べている。前世で見たものがもしかしたらあるのかもしれないし、生きている今見たものでも、意識的に見たり体験したりするだけでなく、無意識のうちに目にしているものや体験しているものもあるだろう。前世にせよ現世にせよ、来世にせよ、自分自身が見て聞いて、体験したものは自分の身となり、自分を表現する時には、その体験が表現の大部分を占めるのではないだろうか。私自身、大学で心理学に関する様々な講義を受ける中で、何かを学んだり考察したりする時、これまでの自分自身の経験から考えることがほとんどだった。むしろ、これまでの経験からしか考えることができなかった。知識として学んだ情報から考えることはできなくはないが、実際に時間をかけて体験したことは、知識以上の何ものにも代え難い自分自身の指針であり、財産なのだと実感する。そして、自分というのは生まれてから死ぬまで一本の線で繋がっている、体験したことの蓄積が自分自身を創り上げているのであろう。自分で経験することがいかに重要かということを考えさせられる。

### (3) 言葉の多面性

また、言葉には表裏があり、それだけでなく多面的でもある。例えば、会社の同僚から「おはよう、顔色悪そうだけど大丈夫？」と聞かれた時、「大丈夫、元気！」と答えたとする。このやりとりから、本当は体調が悪いけれど会社には行かないと迷惑がかかるから元気だと言っているのか、顔色が悪そうに見えるだけで本当は元気なのか、それ以外にも様々な意味が考えられる。文字として「大丈夫、元気」と表現されただけではわからないが、私たちはその人の表情や身体の動き、テンションや話し方など、言葉以外の様々な要素から「大丈夫、元気」という言葉を理解しているはずである。言葉自体の意味ではない、その人の言葉以外の表現から様々な意味を持つ言葉となる。これは、当たり前のように、日常の中で無意識にできていることかもしれないが、今一度この妻さを思い起こすべきであろう。

## 2. アニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』

### (1) 言葉以外の表現方法

アニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』(2020)では、言葉以外の表現方法について考えさせられた。本作は、芥川賞作家・田辺聖子の短編小説をもとに制作され、キャラクターや設定、ストーリーなどはアニメーションのために異なるアプローチで脚色されている。幼いころから車椅子生活で、趣味の絵と本と想像の中で自分の世界を生きるジョゼ。彼女はある日、危うく坂道で転げ落ちそうになったところを、大学生の恒夫つねおに助けられる。海洋生物学を専攻する恒夫は、メキシコにしか生息しない幻の魚の群れをいつかその目で見るという夢を追いかけてながら、バイトに明け暮れる勤労学生である。そんな2人が出会い、触れ合っていく中で、お互いが影響し合い、2人の人生が少しずつ動き、変化していく様を描いている。

外の世界をほとんど知らないジョゼは、恒夫と出会うことで、初めて電車に乗り、海岸や動物園、図書館など、様々な場所に出かける。ジョゼは、初めて乗った電車から見える景色に、目を輝かせて一喜一憂する。日々の何でもないことがいかに素晴らしいのかということを考えさせられる。当た

り前のことであるが、同じ世界でも、見る人によって全く違って見えていることを忘れてはいけない。一つ一つのことに感動するジョゼを見ていると、自分はこんな感覚をいつの間に忘れてしまったのだろうかと思う。

本作では、アニメーションならではの絵の美しさによる映像表現と、効果音や音楽との融合によって、電車の窓から差し込む日の光、夕日が反射してキラキラ輝く海、ステーキが美味しそうに焼ける音など、キャラクターが話す言葉や行動以外の表現によって、キャラクターの感情を伝える要素が数多くあり、それが視聴者にも伝わってくる。

アニメーション制作のように、何かを表現して人に伝える時、言葉で伝えることは重要であるが、「言葉」は人に何かを伝える手段の一つなのだと考えると、伝える手段というのは言葉だけではない。表現して伝えることに関して、人間は五感を使って周囲からの情報を得るのだとすれば、音楽や絵画、食べ物、香り、感触など、五感を使うもの全てが伝える手段になる可能性を秘めている。“可能性を秘めている”というのは、受け取り手が上手く受け取ってくれて初めて伝わるからである。このように考えると、人に伝える手段は無限に広がる。五感以外のものもあるかもしれない。しかし、言葉で伝えるということが端的で簡単であるが故に、人々は言葉を使うことが当たり前で、伝える手段として言葉が大きなパーセンテージを占めているのではないだろうか。私はやはり、相手と同じ空間を共有し、対面することの重要性を常に感じている。2020年以降のコロナ渦で、在宅ワークが推奨されたり、オンライン会議やオンラインカウンセリングが当たり前になったりしていても、やはり対面とは違うことを、皆どこかで感じているように思えてならない。

言葉以外でやり取りをする感覚の例として、『飛び跳ねる思考 会話のできない自閉症の僕が考えていること』(池田、2018)を紹介する。本書は、自閉症であり、話すことが苦手な著者の池田自身が、自分の思いを言葉にしている。第1章「僕と自閉症」の中の「挨拶」というテーマで、池田(2018)は、「僕は、上手に挨拶ができません。言葉をうまく話せないためです。(中略)僕には、人

が見えていないのです。人も風景の一部となって、僕の目に飛び込んでくるからです。(中略)それら全てを相手にすることは、もちろんできませんから、その時、一番関心のあるものに心を動かされます。引き寄せられるように、僕とそのものとの対話が始まるのです。それは、言葉による会話ではありませんが、存在同士が重なり合う、融合するような快感です」と表現している。これは、言葉を使うことが難しいからこそ、より感じられる感覚なのであろう。この感覚は、言葉に邪魔をされて感覚が鈍っているかもしれないが、ある程度言葉で意思疎通できる人も、誰もが持ち合わせている感覚のように思う。

『ジョゼと虎と魚たち』では、登場人物の気持ちの変化がとても丁寧に描かれていて、直接話すわけではなく、表情や動き、話し方など、言葉以外の要素からも細かな感情の動きが視聴者に伝わってくる。言葉以外の何かによって、分かり合えるような、融合するような感覚である。それらが重なっていった時、視聴者の感覚が研ぎ澄まされ、ちょっとした出来事でも感動に繋がっていく。言葉で直接伝える以外の細かい部分を感覚的に拾うことができる。本作は、視覚、聴覚からキャラクターの心情を伝える要素がいくつもあり、言葉で表すよりも、ダイレクトに視聴者に伝わっているように感じる。

## (2) アニメーションによる表現

アニメーション映画というものは、映像と音の表現によって、言葉だけでは伝えにくい感情や思いも視聴者に伝えることができ、言葉だけの表現より、視聴者のこれまでの体験とも繋がりやすく、共感しやすいという面があるように思う。また、言葉だけでは伝わりにくいこともあると考える。例えば、ネットニュースから情報を入手する時、その情報の渦中にいる人たちが、どんな空間で、どういう思いがあってその言葉を誰に伝えたのか、よく知らないまま「言葉」だけに焦点を当てて自分の中に取り入れているように感じる。これは、情報社会において、頻繁に行われていることであろう。実際には真実かどうか分からない情報だけを知識として取り入れることで、日々の生活の中で、あらぬ勘違いをして悲しくなったり、思い込んだ

りしてしまうことが多々起きているように思う。受け取り手の解釈によっても、一つのネットニュースから受ける印象は異なるだろう。言葉だけでは正確に情報を伝えることは難しく、他の手段からも情報を入手する必要がある。本当は、現地へ赴き、自分自身でその場の空気を感じ、体感することが、自分にとって一番正確な情報取得手段であろう。

アニメーションというものは、物語をより理解しやすく、さらに共感できるように、言葉だけではない表現があるからこそ、特別なエンターテイメントになっているのだろう。

## (3) 「伝達的手段」と「美的機能(詩的機能)」

言葉について、言語学者の池上嘉彦(2011)は、「〈ひと〉は大人になるに従って、〈ことば〉を単なる〈伝達的手段〉としてしか認識しなくなる」と述べている。また、言葉は「もともと〈他者〉なる存在でありながら、いつの間にか高度に〈身体化〉され、〈自動化〉され、そのため、ほとんど〈不可視〉の存在になってしまう〈(母語としての)言語〉、そして、ある時ふと差し向けた眼差しを通して垣間見たその姿に不思議さと驚きの入りまじった思いを抱く」(池上、2011)と述べている。生まれてから自然に母語を習得し、話せるようになる、生まれつき話せるわけではなくても、〈ことば〉を自分のものとして使いこなしているかのようである。普段は〈ことば〉を当たり前に使っているという認識さえないのかもしれない。自分では思うままに使いこなせていると感じていても、そうではないことは多分にあるだろう。

また、池上(2011)は「〈伝達的手段〉としての〈ことば〉という〈ことば〉の実用的な面にしか関心を持たないふつうの大人は、〈ことば〉の指す〈もの〉や〈こと〉のほうには関心があるが、〈ことば〉そのものをあらためて見つめ直してみると、このようなことはしない」と指摘している。伝えるための〈手段〉として〈ことば〉を使うことがあまりにも当たり前になり、〈ことば〉の〈意味〉にだけ注目してしまいがちなのだろう。〈伝達的手段〉としての〈ことば〉とは正反対のものとして、例えば詩が挙げられる。また、日本では俳句や短歌などもこれに当てはまる。これを、言語学者の

ヤコブソン (Jakobson, R: 1896-1982) は、言語の〈詩的機能〉と表現した。さらに、池上 (2011) は「(ことばを使うことによって表現される内容よりも)使われている〈ことば〉そのもの(の使われ方)のほうに注目をひきつける働き」と表現し、言語の〈美的機能〉と呼んでいる。このことから、言葉は「伝達的手段」としての言葉と、「美的機能(または詩的機能)」としての言葉の2つの意味を持つと考えられる。しかし、日常生活では、知識として知っている言葉を単に「伝達的手段」として受け取ることがほとんどなのではないだろうか。そして、言葉を受け取る側の経験や知識は一人一人異なるため、言葉を発する側の思いが正確に、「美的(または詩的)」にも伝わっているかということを確認することは難しい。言葉というものが、いかに曖昧であるかということをよく理解しておかなければならない。

#### (4) 無声映画だから伝わること

『ジョゼと虎と魚たち』以上に、アニメーションや無声映画など、登場するキャラクターが基本的には話さない作品は数多くある。効果音や音楽、映像で魅せることで、言葉がなくても観ている人に多くのことが伝わってくる。中でも、私が注目するアニメーション2作品を紹介する。

吉田まほ監督・脚本『就活狂想曲』(2012、東京藝大大学院修了制作)は、就職活動(以下「就活」)の様子を描く、約7分半のアニメーションである。この作品を観ると、就活をしたことのない人は就活がどんなものか理解でき、就活をしている人はどこかに共感できる部分がある。そして、就活の過酷さや難しさは、言葉で説明しても伝わりにくいと感じる。映像と音楽だけで、就活場面での恐怖や疑問、どうすればいいのかわからない気持ちが伝わってくる。また、作画崩壊によって「狂い」を表現しているのも、アニメーションならではの表現方法であろう。

一方、Q rais (キューライス) 監督『失われた朝食』(2015)は、ある男性のモーニングルーティンを描いた約6分のアニメーションである。毎日繰り返される生活が、カラスの乱入により(一つ掛け違えてしまうだけで)どんどん狂って取り戻せなくなってしまう様子を描いている。カーテン

を開け、カラスがいなくなっていた時から(いや、何事もない日常生活の時点で)狂いは既に始まっていたのだと思わせる。そして、同じことを繰り返そうとするが、いつもと何かが違うことに気づいてしまった時のハッとする「間」も、アニメーションにおいて重要だと感じる。このなんとも言えない空気感や雰囲気というものは、どれだけ言葉で表しても伝えることは難しいように思う。

このように、空気感や空間、その時の感情・感覚というのは、言葉では伝えきれないのではないだろうか。「百聞は一見に如かず」という故事成語は有名だが、単に、「百」聞くよりひと目見たほうがわかりやすいという意味だけでなく、見て感じることは、言葉では伝わらないことにも触れる体験ができるということだと考える。いくら言葉で聞いても、その場にいなければわからなかった雰囲気や空気感、その人の本当に伝えたいことはわからないこともある。例えば、自分の好きな歌手のライブに行き感動した時の感覚や場の空気感。それは、いくら言葉で伝えてもその場にいないとわからない感覚で、自分がその場にいたからこそわかることである。言葉がないと説明することは難しいが、言葉だけでは足りないように感じる。言葉だけでなく、さらに何かを付け加えることで、少しは伝わりやすくなるかもしれない。言葉で論理的に「百」聞いたほうが良く理解できることもあるかもしれないと考え、言葉は重要であるが、それと同じあるいはそれ以上に、言葉以外の伝え方も重要であろう。

#### (5) まとめ

アニメーションというのは、ある意味「絵」であるが、それが動き、さらに効果音や音楽、声が付くことで、登場人物や風景に生命が宿り、そのキャラクターは視聴者の心の中で生き続ける。キャラクターの感情を伝えるために様々な手段が駆使された、まさに総合芸術である。また、アニメーションはある意味「創造の世界」であり、現実ではないため、現実世界では起こり得ないファンタジー的な映像やストーリーになっていても受け入れやすく、感情移入もしやすいように思う。言葉だけでは自分の感情を伝えられないからこそ、2022年現在も、多くの人にアニメーションが受け

入れられているのではないだろうか。

### 3. 映画『Coda コーダ あいのうた』

#### (1) 感情表現の手段

次に、シアン・ヘダー監督『Coda コーダ あいのうた』(2021、アメリカ)を紹介する。本作はフランス映画『エール!』(2014)のリメイクとして作られた。タイトルの「Coda」とは、“Child of Deaf Adults”の略語で、ろう者の親を持つ子どもという意味(親のどちらかがろう者の場合も含む)であり、一口にコーダといっても、唇で言葉を読み取るろう者を持つ親であれば言葉で伝えることができるなど、その種類は様々である。

豊かな自然に恵まれた、マサチューセッツ州の小さな漁村で、両親と兄の4人家族の中でひとりだけ耳が聞こえる高校生のルビーは、陽気で個性的な家族の“通訳”係として、家業である漁業も毎日欠かさず手伝っていた。新学期が始まり、ルビーは秘かに憧れるクラスメイトのマイルズと同じ合唱クラブを選択する。すると、顧問のV先生がルビーの歌の才能に気づき、都会の名門音楽大学を受験するよう強く勧める。しかし、ルビーの歌声が聞こえない両親は娘の才能を信じられず、家業の方が大事だと猛反対する。悩んだルビーは夢よりも家族を選ぶ。そんな中、思いがけない方法で娘の才能に触れた父親は、ルビーの歌手になりたいという夢を理解し、ルビーによって家族が少しずつ変化し、前を向いて進んでいく様を描いている。

本作の公式パンフレットに寄せたコメントで、写真家で自身もろう者である斎藤陽道(2021)は、「ルビーの本心は、音声言語ではなく手話でこそ語られる。自分の歌を深めるために欠かすことのできない必要なものだったのだ。手話が、ルビーの歌をさらに深める。手が動けば、歌も深まり、どんどん伸びやかになっていく。手話という私のことばが、私の歌を生み出していた。家族の姿を見ながら手話とともに歌ったとき、ルビーはこのことに気づいたのではないだろうか。とっさの反応にすらも手話が突いて出てしまうように、自分の骨身に染みついてしまっただけで切り離しようがなく、忌み嫌っていたはずの手話こそが、独特の個性となっ

て混じりあいながら、ルビー自身を救う歌を生み出していた。手話。それこそが、ろう者の家族から授かったギフトだった」と述べている。手話がルビーにとっては言葉であり、ルビーが自分の感情を表現するためには手話という言葉は切り離せないものだったのだろう。また、音楽ライターの新谷洋子(2021)は、『「歌うとどんな気分になる?」とV先生に訊かれて言葉に詰まったルビーが、手話に切り替えて活き活きと説明し始める、非常に印象的なシーンがある。しかもここだけは手話の字幕がつけられていないのだが、彼女が何を言わんとしているのかわかるような気がするの、筆者だけではないはず。『音楽とは、言葉では表現不可能な、どうしても抑えられない何かを表す手段』と述べたのは作家のヴィクトル・ユゴードが、体を楽器のように用いて奏でる手話にも、同じことが言えるんじゃないだろうか?」と述べている。私自身、手話を理解することはできないが、ルビーの手の動きや視線、表情を見ていると、彼女は歌うことが好きで、歌うことでもやもやしている心の内がふわっと軽くなり、歌いたいと強く思う気持ちが伝わってきた。彼女にとっては、「歌うこと」が一番の感情の表現方法だったのだ。そして、一人一人、自分の気持ちを伝えやすい手段というのは異なるのだということがよく理解できた。

#### (2) 「音楽」と「言葉」

「歌うこと」の中には、音楽や歌詞、歌手の声色や身振りなど、様々な表現方法が含まれている。その中でも「音楽」と「言葉(歌詞)」という2つの表現方法を考えたとき、「言葉」はその言語を習得していなければ理解できないが、「音楽」に言葉は関係ない。声楽家の池田直樹(2002)は、「声に出して表現できなくても、からだのなかに素晴らしい言葉と声を持つ人がたくさんいる。歩けなくても、歌に感動して、心で踊ることができる人がいる。歌を通じて、心を開き、触れ合うことができる」と述べている。これは、実際に言葉で表現できなくても、人々は身体や心の中に自分の「思い」というものが確かに存在しているということであろう。そして、「歌」という、言葉に音楽が加わった表現は、言葉だけの表現よりも伝わりやすい瞬間があると感じる。音楽は、人々の内面を伝え、表

現するものとして、音楽だからこそ伝えられることや、言葉が通じなくても分かり合えるものや響かれる存在になり得るのではないだろうか。

イギリスの指揮者で音楽監督も務めるサイモン・ラトル (Sir Simon Denis Rattle) は、コロナ禍の延期を経て開催された日本公演の来日前のオンライン記者会見で、「パンデミックが始まったとき、私たちは原点に立ち返り、人々の内面を伝える音楽の必要性を改めて思い知りました。戦争が始まり、その確信はより強くなりました。歴史の動きの証人になり、人々に癒しを与え、良き団結を促す。これは音楽家である私たちにしかできないことであり、また、音楽家にはこれしかできないのです」(2022、朝日新聞)と語っている。「言葉で言ってくれないとわからない」ということも多分にあるが、それは表面的に「私はこうだ、私はこう思われたい」という意思表明に過ぎないとも言える。内面の深いところまで、言葉だけで伝えるのはかなり困難なことだと感じる。音楽は、曖昧な表現と捉えられるかもしれないが、曖昧だからこそ、感覚的に伝えることができる。曖昧な表現方法は、ある意味では一番伝わりやすい表現だとも考えられる。

音楽療法士のBunt (1996) は、音楽の力について「音楽は人間のもっとも奥深くにある情緒的、精神的、かつ私的な自己と結びついているという事実が存在する」と述べている。音楽の力というもの強く感じる。

### (3) 表現の種類

ルビーは歌うことで自分の感情を人々に伝えたい。でも、それが家族に歌では伝わらず、伝えられる時は来ない。最終的に彼女は音楽大学のオーディションを受けることになる。その時、家族がオーディション会場の2階席に入ってきたのを見て、ルビーは途中から歌に手話を付け加えた。彼女にとっては、歌うことが好きで、本当はそれを家族にも伝えたい。しかし、家族にも伝えるためには手話という手段を使うしかない。このシーンのルビーの歌と手話、そして目線や表情など、彼女の様々な表現から、彼女の気持ちを感じ取ることができる。自分のことを伝える手段として、「言葉」が全てではない。音が聞こえる人たちは、音、

そして言葉に頼り過ぎているように感じる。言葉だけにフォーカスしてはいけけないのではないだろうか。

## 4. 言葉の重要性と必要性

ここまで、「言葉」がいかに曖昧で不確かなものであるかということを考えてきた。一方、それぞれの作品の中で、「言葉」だからこそ納得できたり、強く心に響いたりするというものも感じた。「言葉」がいかに重要で、意味のあるものかということをも作品とともに紹介する。

『グッド・ウィル・ハンティング』のウィルは、里親から虐待を受けていた過去から自分に罪の意識があり、それがずっとウィルの心に重くのしかかっていた。ショーンとのカウンセリングも進み、関係も深まってきたところで、ショーンから「君は悪くない」という言葉をかけられる。ウィル自身も自分は悪くないと理解はできていても、心の中ではどうしても納得ができていない。それでもショーンは何度も「君は悪くない」と言い続け、ついにウィルは自分の思いを理解してくれる人がいるんだと納得でき、泣き崩れる。言葉ではわかっているつもりでも、心で納得できていなければ言葉は意味をなさないが、信頼できる人から言葉で何度も示してくれたことで、閉じていた心が開かれ、理解することができたのだ。これは、言葉を本当の意味で理解し、納得するためには人との関わりや関係性が重要であることと、言葉には言葉だからこそそのとても強い力があるのだということを考えさせられる。

『ジョゼと虎と魚たち』では、ジョゼが恒夫に向けた紙芝居を自作し、それを恒夫の前で読み聞かせるシーンがある。これまで感情や気持ちを言葉以外の表情や仕草、風景や音楽で表現していたのに対して、このシーンでは紙芝居を通して恒夫に直接「言葉」で語るため、言葉がダイレクトに、そしてシンプルに心に入ってくる感覚がある。言葉には、言葉だからこそダイレクトに人の心に伝わるといえるように思う。

そして、『Coda コーダ あいのうた』のルビーは、最終的に音楽大学合格を果たし、実家から友人の車で旅立っていく。家族がルビーを見送る時、ろ

う者の父が、映画の中で初めて言葉を声に出して「Go」と発する。娘を見送り、安心して行ってこいと背中を押す一言である。「言葉」で伝えることがどれほど重要で、意味のあることかということ思い知らされる。言葉は、一言発するだけでもものすごい力を秘めている。

### 総合考察

作風の異なる映画3作品から「言葉」についての考察を進める中で、言葉の曖昧さを実感するとともに、言葉だからこそ伝わるということも理解した。様々な本や文献を読んでいると、そのどれも、読んでいて言葉の力に圧倒される。というのも、書き手の考えや思いが、実際には会ったことがなくても手に取るように伝わってくるのが感じられるからである。「思い」というのは言葉にも乗せられるものなのだ痛感する。一方で、筆者の意図がどこまで私に伝わったのか、正確に読み取っていたのかというと定かではない。映画や音楽などのエンターテインメントは、表現者の元を離れた瞬間、自由に理解され、別にそれをどう捉えようが受け取り手の自由である。言葉の曖昧さを実感した今、「言葉」というものが、自分を表現する手段としてそこまで信頼して良いものなのかはわからない。しかし、言葉だから伝わること、言葉だから理解できることなど、「言葉」が非常に優れていることは確かである。その「言葉の力」を理解しつつも、本論文の冒頭で述べたように、音楽での表現を行ってきた者は、「言葉」の力以上に「音楽」の力を感じているのではないだろうか。特段「音楽」がというわけではなく、例えば、絵を描くことやダンスをすること、料理をすることなど、言葉以外の手段で自分を表現することが得意な人にとっては、それが言葉を上回る力を持つことは大いに考えられる。

心理療法の中に、遊戯療法（プレイセラピー）や箱庭療法、音楽療法といった、言葉以外の表現によるものがある。これらは、一見すると言葉を使いこなしているように見える人たちにとっても、自分を表現する方法が広がり、セラピストとクライアントが言葉でやり取りをする以上に、効果的により意味のあるものになる可能性があり得る。

Bunt (1996) は、「音楽は、はじめて出会う人どうしを即時的に結びつける力や、人間を過去のイメージや近未来の予測と関連づける力を有する」と述べている。音楽の力を感じるとともに、言葉の物足りなさも感じる。このように、「言葉」の力は人それぞれで、自分の考えや思いを伝える手段は言葉だけだと考えることは十分ではない。言葉以外の表現方法にはどのようなものがあるか、言葉以外のそれぞれの表現方法によってどのような違いがあるのかなど、今後、言葉以外の様々な表現についても考えていきたい。

「言葉」というのは、相手に何かを伝えたり、自分の思いを表現したりするために重要であるが、何かを伝える手段としてはかなり不完全なものである。そして、言葉だけが伝える手段ではないことを忘れてはいけない。しかし、言葉を使って表現することもまた、自分の思いを伝える重要な手段の一つであり、ほかにも自分を表現できるものは数多くあり、それは無限である。やはり、言葉というのは難しいが、言葉は重要である。しかし言葉だけではない。

### 引用文献・参考文献

- アニメ映画『ジョゼと虎と魚たち』公式サイト、  
<https://joseetora.jp/> (2022.12.20 閲覧)
- 映画『Coda コーダ あいのうた』公式パンフレット
- 東田直樹 (2018). 飛びはねる思考 会話のできない自閉症の僕がかんがえていること 角川文庫
- 池上嘉彦 (1984). 記号論への招待 岩波書店
- 池上嘉彦・窪蘭晴夫・大津由紀雄・西山佑司 (2011). ことばワークショップ 言語を再発見する 開拓社 言語・文化選書 26
- 河合隼雄 (1997). 河合隼雄全対話⑦物語と子どもの心 第三文明社
- 河合隼雄・阪田寛夫・谷川俊太郎・池田直樹 (2002). 声の力 歌・語り・子ども 岩波書店
- Bunt, L. (1994) *Music therapy: An art beyond words*. London: Routledge, 稲田雅美 訳 (1996). 音楽療法——ことばを超えた対話

## 「言葉」の意味についての一考察

ミネルヴァ書房

Q rais “失われた朝食 / The lost breakfast”  
YouTube. <<https://youtu.be/rtcH5k2-fLM>>  
(2022.12.20 閲覧)

Sir Simon Denis Rattle 「良き団結を」, 朝日新聞,  
2022-09-08, 夕刊, 大阪, p. 3

ウィキペディア (Wikipedia) 「グッド・ウィル・  
ハンティング / 旅立ち」 [https://ja.wikipedia.  
org/wiki/%E3%82%B0%E3%83%83%E3%83](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B0%E3%83%83%E3%83)

%89%E3%83%BB%E3%82%A6%E3%82%A3  
%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%8F%E3  
%83%B3%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83  
%B3%E3%82%B0/%E6%97%85%E7%AB%8  
B%E3%81%A1 (2022.12.20 閲覧)

youmahotube “アニメーション「就活狂想曲」”  
YouTube. <<https://youtu.be/M6rb6kknj3A>>  
(2022.12.20 閲覧)